

失われた「眠り」を求めて  
— 『骨董屋』における「眠り」について—<sup>1</sup>

渡部智也

1. 序

チャールズ・ディケンズの小説四作目に当たる『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*)は、作品冒頭の骨董屋で眠るネルと、作品の最後で永遠の眠りにつくネルという二つの有名な挿絵付きの場面に代表されるように、眠りに関する描写が非常に目に付く作品である。<sup>2</sup>しかしながら、この二つの場面に関する論考を除いて、これまでこの作品の眠りについて十分な注意が払われてきたとは言えない。J. E. コズネット (J. E. Cosnett) が述べているように、ディケンズは人の眠りや夢に強い関心を持っていた作家と考えられる (Cosnett 264)。とりわけ眠りの場面が多く描かれるこの作品において、その眠りの描写を考察することは、そのような作家ディケンズの、そしてこの作品の理解を深める上で不可欠であろう。本稿では主人公ネルの眠りに着目し、彼女の眠りが作品構成上重要な役割を果たしていることを、伝記的事実を交えて考察したい。

2. ネルの眠り

『骨董屋』は主人公ネルの遍歴を中心に描いた物語である。そして彼女の遍歴を辿る時、そこに必ず眠りが関わっていることが分かる。物語の始め、彼女は祖父のトレント老人と骨董屋で生活している。貧しいながらも今の暮らしに満足しているネルは、祖父が夜出かけた後、グロテスクな骨董品に囲まれながらも幸せそうに眠りにつく。

I [the narrator] sat down in my easy-chair, and falling back upon its ample cushions, pictured to myself the child in her bed: alone, unwatched, uncared for, (save by angels,) yet sleeping peacefully. So very young, so spiritual, so slight and fairy-like a creature passing the long dull nights in such an uncongenial place! I could not dismiss it from my thoughts [ . . . ].

But, all that night, waking or in my sleep, the same thoughts recurred, and the same images retained possession of my brain [ . . . ] alone in the midst of all this lumber and decay and ugly age, the beautiful child in her gentle slumber, smiling through her light and sunny dreams. (15-16)

眠りながら笑っている (“smiling”) ことから明らかなように、彼女は幸せを感じ、良い眠りを得ていることが伺える。またこれに先立つ場面では、何とかお金を稼ぎたいと言う祖父に対し、“I am very happy as I am, grandfather” (11) と今のままで満足だと

述べる。この台詞からは、ネルにとってこの骨董屋での生活が、貧しくも満足のいくものであることが良く分かる。

しかし程なく、このささやかな幸せは破壊されることになる。金貸しクイルプとの邂逅や、ひそかなギャンブルの失敗でやつれた祖父の姿を見て不安になったネルは、祖父が自殺するのではと怯え、夜、なかなか眠れなくなる。そしてやっと眠りについた時でも、しばしば“to listen for the bell and respond to the imaginary summons which had roused her from her slumber” (75)と、眠りから覚めてしまう様が描かれる。先ほどまでの幸せな眠りと明らかに異なることが分かるだろう。

最終的に彼らはクイルプから借りた金を返せなくなったために店を差し押さえられてしまう。クイルプは彼女にとっての迫害者であり、またかつ厄介な求愛者でもある。彼は彼女を“Such a fresh, blooming, modest little bud” (77)と表現し、彼女が自分の所にやってきた時には、“Has she come to sit upon Quilp’s knee” (91)と呼びかけ、更には“How should you like to be my number two, Nelly?” (48)と、自分の妻が死んだら後添えにならないかと述べて彼女を怯えさせる。クイルプはさらに、彼女から眠る場所そのものを奪い取る。骨董屋を手中に収めた上でネルの部屋を訪れたクイルプは、“The bedstead is much about my size. I think I shall make it *my* little room” (91)と述べて彼女の部屋を自らのものとし、彼女がそれまで眠っていたベッドで眠るようになる。ベッドを奪うという行為が性的な意味合いを帯びているのは明白であろう。このように、彼女が心地よい眠りを失う背景には、積極的に性的アプローチを仕掛けてくるクイルプに対する不安があると思われる。

クイルプの支配から逃れるために、この後二人は隙を見て脱出し、逃避行に入る。二人の旅においても、眠りは重要な局面で登場している。この旅の中で、ネルは行く先々で眠る姿が描かれる。しかし、何らかの理由で眠りを得られなくなるとまた別の場所に移動し、そこで再び眠り込む。基本的に彼女の旅は、このパターンの繰り返しで構成されているのである。したがって比喩的に言えば、彼女にとって、この旅は失われた眠りを求める旅なのだ。時系列に沿う形で彼女の旅と眠りとの関連を考察すると、このことがより強く感じられる。最初に二人が出会うのは、農夫の一家である。一家は親切な荷馬車の御者に頼んで、徒歩の旅に疲れた二人を荷馬車に乗せてくれる。その荷馬車の上で、彼女は“she fell asleep, for the first time that day” (126)と気持ちよく眠り込む。

次に会うのはパンチ劇の芸人、コドリンとショートである。この二人と同じ宿に泊まったネルは、当初は“deep slumber” (132)を得、目覚めると“hoping and trustful” (132)になっていた、と、心地よく眠る場面が描かれる。しかしこの二人がネルと祖父とを分断する腹積もりだと気づいてからは不安になり、ついには二人のもとから逃げ出すことになる。ここで見落としてはならないのは、ネルに不安を与えるこの二人の男性もまた、クイルプ同様、彼女に対して迷惑な愛情を持っているという点だ。特にコドリンは夜、彼女の部屋にやってきて非常に思わせぶりを言い、また旅の途中で奇妙な行動をとり

(“following close at her heels, and occasionally admonishing her ankles with the legs of the theatre in a very abrupt and painful manner” ; 152)、彼女を不安にさせる。重要なのは、彼女の不安が彼らの行動によって強められており、その行動の根底にあるのが、彼女に対するよこしまな気持ちだという点である。後にネルと老人を探す独身紳士と会った際、コドリンはネルについて、“I loved her, and doated on her” (289) と述べて、少なくとも言葉の上で、自分が彼女に対して並々ならぬ関心を持っていたことを示唆する。この台詞から、コドリンがいささかクイルプに似た形で彼女を愛し、その迷惑な愛が彼女を怯えさせ、逃げ出させたとも考えられるだろう。

一方、この次に出会った村のマートン先生は、彼女達に食事と寝床を与えてくれる親切な人物として描かれ、そのおかげで二人は彼のもとで“a sound night’ s rest” (192) を得ることが出来る。この場面は、不安から解放されている時には彼女の良い眠りが描かれる、というパターンの存在を示唆している。

同じく、次に出会う蠟人形館の主人であるジャーリー夫人もまた、彼女の保護者的役割を果たしてくれる。ネルのことを気に入った彼女は二人を雇い入れる。そしてネルは「ジャーリー夫人自身の馬車の中で眠ること」 (“to sleep in Mrs Jarley’ s own travelling-carriage” ; 213) を許されるのである。

こうして良い寝床を得たネルであるが、ある街でクイルプが自分のほうに向かって手招きしているのを目にして非常に恐怖する。

Notwithstanding these protections, she could get none but broken sleep by fits and starts all night, for fear of Quilp, who throughout her uneasy dreams was somehow connected with the wax-work, or was wax-work himself, or was Mrs Jarley and wax-work too, or was himself, Mrs Jarley, wax-work, and a barrel organ all in one, and yet not exactly any of them either. (215)

ここではあくまでネルがクイルプに気がついただけで、逆に彼の方は召使のトム・スコットを呼んでいるだけで、彼女のことに気がついていない。それでも彼の存在が彼女を大きく悩ませ、結果的に彼女の眠りに影響を与えているのは明白だろう。この後も彼は“a perpetual night-mare” (224) となって彼女を苦しめるようになる。

興味深いのは、ネルの祖父が全く彼のことを恐れていないという点である。実際、彼はロンドンを脱出して以降、クイルプについて言及することは一度もなく、ここでも、クイルプを見かけてとても怖がっているのではないかと祖父のことを心配するネルをよそに、“he was sleeping soundly” (215) とぐっすり眠り込んでいる様が描かれる。確かに見えていないものを恐れることが出来ないのは当たり前であるが、ここでディケンズがネルにはクイルプを見させることで怯えさせる一方で、祖父にはクイルプの存在に気づかせずに安穩とした眠りを与える、という描き分けを行ったことは、注目に値する。二人の扱いの

差から、クイルプがネルの眠りだけを脅かしている、ということが読み取れるのではないだろうか。この問題を考える時、先ほど述べた、彼が“night-mare”となって彼女を苦しめる、という表現が重要になる。本作品全体で、“nightmare”という語は先ほどの例を含めて3度しか使われていないのだが、そのいずれもがクイルプによってもたらされるもので、他の2例は、クイルプ夫人に関するものなのである。そのうちの1つに関連して、彼女がタバコを吸う夫の横で一晩中起きていることを強要される場面がある。彼は夫人に、“sit where you are, if you please, in case I want you” (39) と命令して彼女を自らの側におき、眠ることを許さない。この場面について、ゲイブリエル・ピアソン (Gabriel Pearson) は “the closest we get to downright copulation in early-Victorian fiction” (Pearson 84) であると述べている。この考えが正しいとすれば、他人の眠りを奪うというクイルプの行為は、彼の性的欲望と関連していることになる。そうすると、ネルが眠れなくなるのは、他者の性的欲望の対象となることで、不安にさらされた時だということになるのではないだろうか。

これは次にネルの眠りが奪われる出来事によって裏付けられる。偶然立ち寄った宿屋でトランプをしている男達を見かけたことがきっかけで、彼女の祖父のギャンブル熱が再燃してしまう。やむなくその宿屋に泊まり、夜眠りにつこうとした時に、次のような事件が起こる。

At last, sleep gradually stole upon her - a broken, fitful sleep, troubled by dreams of falling from high towers, and waking with a start and in great terror. A deeper slumber followed this - and then - What! That figure in the room. (235)

彼女に深い眠りが訪れようとしていたまさにその時に男が部屋に侵入し、ネルの持つ金を奪っていくのである。無論、ここで盗みを働くのはネルの祖父であり、そうとは知らずに心配になって祖父の部屋を見に行ったネルは、彼がいやしく彼女から盗んだ金を数えているのを目撃してショックを受け、もはや眠れなくなる (“she [. . .] sat up during the remainder of that long, long, miserable night” ; 238)。このように彼女の祖父もまた、彼女から眠りを奪っているのだ。この場面にも性的な意味合いが示唆されていることは見逃せない。ここで描かれているのは、一人で眠る少女の部屋に、見知らぬ男が侵入するという構図である。そのような状況下で少女を感じる第一の不安というのは、当然男による性的暴行への恐れであろう。実際、この場面はその不安を強く感じさせる。ロバート・ニューサム (Robert Newsom) はこの場面が「窃盗とともにレイプを思わせる場面」 (“a scene that reads as much like a rape as a theft” ; Newsom 89) と述べている。キャサリン・ウォーターズ (Catherine Waters) もまた、この場面でディケンズがネルの制限された視点をを用いることで、性的暴行の脅威を伝えていると論じている (“Dickens’ s use of Nell’ s limited point of view to register the invasion of her room as a threat of

sexual violation while she remains paralyzed by fear” ; Waters 127)。この場面もまた、男性の性的な脅威によって、ネルの眠りが奪われるというパターンを示しているのである。

その後ネルは何とか祖父を言いくるめて逃げ出し、行った先で眠り込むものの、すぐに男達によって眠りから覚まされてしまう。追っ手から逃れるためにこの男達と一緒にボートに乗って旅を続けるネルたちであるが、彼らに“You’ ve got a very pretty voice, a very soft eye, and a very strong memory” (335) と言われ、一晩中歌を歌わされて眠ることができない (“with little cessation, and singing the same songs again and again, the tired and exhausted child kept them in good humour all that night” ; 336)。つまり、ここでも男性によって眠りを奪われる形になっているのである。確かに、眠りを奪われるという共通点はあるにせよ、先ほど述べたネルの祖父がネルの部屋に侵入する場面とこの場面とを同じように扱うのは奇妙に思われるかもしれない。しかし、既に述べたことではあるが、ピアソンがクイルプとクイルプ夫人に関して述べていたように、この小説においては眠りを奪われるという場面そのものに性的な意味合いが込められていると考えられる。とすれば、この男達もまたネルを性的に脅かしていると言えるのではないだろうか。

一方で、ネルの祖父はボート上でぐっすりと眠る姿が描かれている (“Her grandfather lay sleeping safely at her side” ; 334)。クイルプがネルの眠りだけを脅かしており、トレント老人の眠りは脅かしていない、という事実は既に述べたが、同様にここでも眠れなくなるのはネルだけなのである。したがって、このボート上での眠る祖父と眠れぬネルというコントラストもまた、ネルの眠りと性の問題との関連を強調している。

彼らの元を離れたネルは、工場で働く一人の労働者に助けられる。彼はネルと老人を炉の近くに連れていき、温かい寝床を提供してくれる。そして彼女はここで “slept as peacefully as if the room had been a palace chamber , and the bed, a bed of down” (344) と久方ぶりに良い眠りを得る。ネルは男性に良い眠りを奪われるケースが目立つのだが、ここでは逆に心地よい眠りを与えられている。それは同じ男性でも、この労働者は彼女を女性としてではなく子供として、保護者的な視点から彼女を見ているからである。この事実は彼女が語り手によってどう呼ばれているかに現れている。

ここで少し本作品の語りについて触れておこう。本小説は、物語の導入部にあたる1章から3章までを、ハンフリー親方という一人称の語り手が、4章以降を三人称の全知の語り手が語るというやや特殊な語りの構造をしている。このうち、4章以降の三人称の語り手はネルを表現する際、“Nell”、代名詞の“she”、そして“child”の三つを主に用いている。そのうち、上述したボート上のシーンでは、Nellという女性の名前が12回、性別を内包しない“child”という語が6回という割合で使用されているのに対し、この労働者と一緒にいる場面では、“child”が16回、“Nell”が6回使用され、使用の比率が逆転しているのだ。語り手の言葉とはいえ、これらの呼称の違いは、両人物がネルのことをどう見ているかという違いを反映していると考えられるだろう。このように、彼女の眠りは性的

な不安から解放されたことと密接な関連がある。

この後も旅を続けたネルは、疲労困憊で倒れてしまうが、運良く再会したマートン先生に助けられる。彼によって宿屋に運ばれたネルは、そこの気の利く女主人、つまり性的な意味で脅威を与えることのない存在のおかげで“a refreshing sleep” (354)を得ることができる。

マートン先生と一緒に旅を続けた二人は、先生の赴任先である古い村に到着する。ここで自分の家になる予定の場所を見たネルは、その厳かさに心を打たれ、“A quiet, happy place - a place to live and learn to die in!” (398)と述べる。そしてその夜、彼女は眠り込み、次のような夢を見る。

Again, too, dreams of the little scholar; of the roof opening, and a column of bright faces, rising far away into the sky, as she had seen in some old scriptural picture once, and looking down on her, asleep. It was a sweet and happy dream. The quiet spot, outside, seemed to remain the same, saving that there was music in the air, and a sound of angels' wings. After a time the sisters came there, hand in hand, and stood among the graves. And then the dream grew dim, and faded. (402)

ここで“old scriptural picture”、“angels' wings”といった表現が天国のイメージを強調している。この描写からは、ネルが自らの死を感じ取っているということとともに、彼女がそれを受け入れていることが伺える。また、この心地よい夢の中に、彼女がこれまで出会ってきた無垢な女性や子供は登場するものの、男性が登場しないという点は、再び彼女の眠りと性との密接な関係を示唆していると言えるだろう。

そして、ネルの最期がやってくる。彼女を追ってきていた元召使のキットたちが到着すると、まずトレント老人が彼らを迎え、ネルは眠っていると繰り返し述べてネルと眠りのイメージのつながりを強調する。以下に、彼がネルの眠りに言及した箇所を列挙する。

“She is asleep” (549)

“She is still asleep” (550);

“She is sleeping soundly” (550);

“Sleep has left me, [. . .] It is all with her!” (551);

“She has slept so very long. [. . .] It is a good and happy sleep - eh?” (551-552);

“she was still asleep, but that he thought she had moved. [. . .] He had known her do that, before now, though in the deepest sleep the while” (552)

実際のところ、既に彼女は死んでいるのだが、読者もキットたちもこの時点ではそのこと

は分からない。しかし、このように度々彼女が眠っているという台詞が立て続けに繰り返されるのに加え、初めは“*She is asleep*”、“*She is still asleep*”と言っていたものが、ページが進むと“*Sleep has left me . . . It is all with her*”、“*She has slept so very long*”と言うように、老人の台詞から彼女の眠りが普通ではないことが徐々に伺え、読者は彼女が既に死んでいるのではないかという疑念を感じるようになる。そしてその疑念どおり、彼女が既に死んでいたという事実が明かされる。キットたちは彼女の死体を目の当たりにするのだが、ここでも再び眠りのイメージが用いられている。

*She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. (554)*

ここで彼女の死は眠りと比較されている。この描写からは、彼女の死は辛いものではなく、むしろ大なる救済をもたらすものだということが感じられるだろう。実際、この直後には、「彼女のこの世での心配事の跡や、苦しみや、疲労」(“*the traces of early cares, her sufferings, and fatigues*” ; 554-5) は「全てなくなった」(“*All gone*” ; 555)と述べられている。彼女の死の描写は読者に、彼女は死んだのではなく、ただ穏やかに、そして幸せに、永遠の眠りについてのだという印象を与えるのである。言い換えれば、これまで良い眠りを求めるように旅をしてきた彼女が、最期にようやく理想としていた眠りを得られたのである。

彼女にとっての理想の眠りが死であったということ、そしてその眠りが冒頭に現れた彼女の骨董屋での眠りと類似している点には注意が必要である。骨董屋では、彼女はおぞましい骨董品に囲まれながらも、にこやかに眠りにについている様が描かれていた。一方最期の場面では、古い厳かな建物の一室で、穏やかに眠るように死んでいるのである。このように、両者は構造的に非常によく似ていると言える。<sup>3</sup>この類似は、ネルの求めていた眠りが、実は最初に得ていた眠りだったということを示唆しているのではないだろうか。既に述べたように、ネルは物語序盤で祖父に「今のままでとっても幸せよ」と言っていた。彼女の台詞は、一つには現状に対する満足を示したものと思われるが、もう一つには、「変わりたくない」という彼女の思いを内包しているのである。

ネルの死の直前における祖父の台詞をあわせて考察すると、このことの重要性がより深く理解できるだろう。それまで彼は、口先だけネルのことを思っていると言いながら、実際は知らず知らずのうちにネルを苦しめてばかりいた。しかし、とうとう最後に彼は“*She needs rest, [. . .] ; too pale - too pale. She is not like what she was*” (420)と述べて、ネルの様子がおかしいことに気がつく。やがて彼はネルを注意深く見守るようになり、“*she grew stronger every day, and would be a woman, soon*” (422)と自分に言い聞かせる。この台詞はつまり、彼女は子供のままの状態で死んでいくということを

意味する。そして死ぬことで、彼女は男性達の性的脅威だけでなく、自らの女性としての性からも解放されることになったのである。

これまでも、ネルの旅と性的な脅威とを結び付けた論考は存在した。例えばマイケル・スタイグ (Michael Steig) は、“Nell’s response to the sexuality of Quilp grows into a pattern of flight” (Steig 168) と述べて、ネルの旅が彼女を性的に脅かすクイルプからの逃避であると論じている。確かにクイルプの与える性的な脅威が並外れたものである点は疑いようがない。しかし、眠りと不眠に注目すれば明らかなように、彼女はクイルプだけでなく、多くの男性登場人物によって性的に脅かされているとさえ言える。そして性から逃れるために、彼女は永遠の眠りにつくよりほかなかったのである。

### 3. ネルとメアリー・ホガースのイノセンス

では、なぜネルはこれほどまでに性を恐れる人物として描かれているのであろうか？また、なぜそこに眠りが関わってくるのだろうか？この問題を考えるには、ネルのモデルについて考察する必要がある。ネルのモデルはディケンズの義理の妹、メアリー・ホガース (Mary Hogarth) だと言われている。<sup>4</sup>彼女はディケンズの妻キャサリンの妹で、ディケンズの才能を非常に尊敬し、彼を慕っていた。そしてディケンズもまた大いに彼女を気に入り、密かな愛情すら感じていたようである。しかし、1837年の5月6日、彼女は帰宅後に突如として病に倒れ、翌日帰らぬ人となってしまったのである。彼が当時連載していた『ピクウィック・ペーパーズ』(*Pickwick Papers*) と『オリヴァー・ツイスト』(*Oliver Twist*) の連載を一時ストップさせたという事実が、この出来事の彼に与えた影響の大きさを物語っているだろう。<sup>5</sup>傷心の彼は、彼女の墓碑銘に、“Young Beautiful And Good / God in His Mercy Numbered Her With His Angels / At the Early Age Of Seventeen” (*Letters Vol. 1* 259) と刻んだとされている。一方、死んだネルについて描く際、ディケンズは全く同じ形容詞を用いて、“so young, so beautiful, so good” (558-9) と描写しているのである。更にディケンズは『骨董屋』の執筆当時、親友ジョン・フォースター (John Forster) に宛てた手紙の中で、「この物語をどうしたらよいかと考えただけで、僕の古傷は開いてしまうんだ。この悲しい物語を考えると、いとしいメアリーが死んだのが昨日のような気がしてくる」(Forster 122) と述べている。

これらの状況証拠がある一方で、マイケル・スレイター (Michael Slater) はメアリー・ホガースをネルのモデルとはみなさず、ディケンズはあくまでメアリーの死に直面した時の悲しみを再現することによって、ネルの悲しい死を描こうとしたのに過ぎないと論じている (Slater 95-6)。またピルグリム版 *Dickens’ s Letters* の編者たちも、メアリーがモデルだとする説には疑念を呈している (House 他 xii)。

しかし、私にはやはりネルはメアリーをモデルとして生み出されたと思われる。そう考える理由は、上に述べたような状況証拠に加えてもう一つ、メアリーとネルのつながりを示すものがあるからだ。それが本稿で扱ってきた、「眠り」なのである。これまで考察して

きたように、ネルと眠りとの間には密接な関わりがある。実際、ネルほど眠りのイメージと結びつく登場人物は他に存在しない。既に述べたように、“sleep”や“slumber”、“dream”などの眠りと関わりのある言葉の使用数を見た場合、『骨董屋』が使用数、使用頻度ともに他の作品を圧倒しているのだが、その中でもネルの眠りに関する言及は群を抜いている。<sup>6</sup>そして同様に、メアリーもまた眠りと密接に関わる女性なのである。というのも以下の引用にあるように、彼女の死後、ディケンズは毎日のように夢の中で彼女と会っていたからだ。

After she died, I dreamed of her every night for many months - I think for the better part of a year - sometimes as a spirit, sometimes as a living creature, never with any of the bitterness of my real sorrow, but always with a kind of quiet happiness, which became so pleasant to me that I never lay down at night without a hope of the vision coming back in one shape or other. And so it did. I went down into Yorkshire, and finding it [the dream of Mary] still present to me, in a strange scene and a strange bed, I could not help mentioning the circumstance in a note I wrote home to Kate. From that moment I have never dreamed of her once, though she is so much in my thoughts at all times [. . .] that the recollection of her is an essential part of my being, and is as inseparable from my existence as the beating of my heart is. (*Letters* Vol.3 484)

これは彼がメアリーの母親であるホガース夫人に宛てた 1843 年の手紙である。この中で彼は、メアリーが死後毎日のように彼の夢の中に現れ、これがとてもうれしいので毎晩眠る時には必ず今日も夢の中で会いたいと思いながら寝ている、と述べている。そして、実に数ヶ月にもわたって夢の中で対面していたと言うのである。言うなれば、メアリーは死んだというよりも眠りの世界の住人になったのであり、ディケンズにとってメアリーと眠りとは切っても切り離せない関係になったのである。したがって、ネルに眠りの描写が多用されているということ自体が、二人のつながりを示していると言えるのではないだろうか。

興味深いのは、今あげた手紙の後半部分で、ディケンズがこの事実を妻キャサリンに告げたとたん、メアリーは夢の中に現れなくなったと述べている点である。これは、彼が心の奥底で、自分の義理の妹への不義の愛に対する罪の意識があったためと思われる。この問題に関し、ジャック・リンジー (Jack Lindsay) は次のように述べている。

But when she died, the whole machinery of taboo-fear was set into action. Her relationship with Charles became the utterly forbidden thing, and she was snatched away by omnipotent authority. At the same time, [. . .] he had to face the unconscious conviction of himself as her murderer. (Lindsay 135)

ディケンズは彼女の死に責任を感じ、自分が彼女を殺したようなものだとさえ思っていたと言うのである。確かにこれまでも指摘されてきたように、ディケンズにとってメアリーは purity や innocence を象徴する存在であった。<sup>7</sup> そんな彼女を自らの欲望で汚してしまったために、彼女が死んでしまったと考えたとしても、なんら不思議ではないだろう。こう考えると、ディケンズが酷く性を恐れる存在としてネルを描いている理由も見えてくる。ディケンズはネルの物語を描くことで、メアリーに償いをしようとしたのではないだろうか。この目的を果たす上で必要なことは、メアリーを体現する登場人物を生み出し、その人物を徹底して性から遠ざけ、完全な無垢を保つことである。だからこそ、彼は小説の中で自分自身をモデルとする好人物を生み出し、最終的にその人物とネルとを結婚させてハッピーエンドで締めくくるようなことはせずに、彼女を無垢な状態のまま死なせたのである。ネルが性的なものを恐れるのは、それが作者自身の許されざる愛を反映したものであるからなのである。

#### 4. 結び

これまで数々の批評家がディケンズとキルプの密接な関係を指摘してきた。<sup>8</sup> 中でも小松原茂雄は、ディケンズとメアリー・ホガースの関係とキルプとネルとの関係を関連付けた上で、キルプについて、「ディケンズの罪悪感が彼のメアリーへの愛をどす黒く彩って、リビドーの闇の中で彼は自らの姿を醜怪極まる野獣的なイメージに作り上げた」（小松原120）と論じている。確かにキルプは非常に暴力的な醜い小人として描かれ、またその最期も、テムズ川の黒い波に飲み込まれて溺れ死ぬという極めて残酷なものである。それゆえこれらの特徴はそのまま、ディケンズの許されぬ愛と、それを罰したいという気持ちと密接に対応するようにも思われる。しかしネルの眠りに着目すると明らかなように、作品中でネルに色目を使うグロテスクな人物というのはキルプだけでは決してない。多くの男性キャラクターがネルを性的に脅かしていると言えるのであり、程度の多少こそあれ、キルプはそのうちの一人に過ぎないのだ。こう考えると、この作品は多くの登場人物の性的欲望が渦巻く物語であり、それはすべて作者のメアリーへの欲望を映したものだと言えるのではないだろうか。そして、ネルをそのような欲望の届かないところ、永遠の眠りの中に追いやることで、作者は彼女への償いを果たそうとしたのである。このような観点から見れば、『骨董屋』はこれまで考えられてきた以上に筆者ディケンズの強い欲望と罪の意識が込められた作品と言えるのではないだろうか。

## 注

- 1 本稿は、日本英文学会関西支部第三回大会（2008年12月20日、於関西学院大学上ヶ原キャンパス）で行った研究発表「失われた「眠り」を求めて：『骨董屋』における「眠り」について」に加筆、修正を施したものである。
- 2 “sleep”、“dream”、“slumber”、“nap”、“doze”といった眠りと関連する語のディケンズ作品における使用数および使用頻度を見た場合、『骨董屋』全体では、眠りと関連する語は313回使用され、その使用頻度は710.06語に1語というペースである。これに続く作品が、『バーナビー・ラッジ』の使用数274語、948.48語に1語というペースであり、また全作品平均では1520.97語に1語という頻度であることをあわせて考えれば、『骨董屋』がディケンズ作品の中でとりわけ眠りへの言及が多い作品であることは疑いようがないであろう。なお、例えば“dream”は「将来の夢」というような意味で使う場合もあるが、そのような例は除外した。また、これらのデータを収集するに当たり、*The Victorian Literary Studies Archive*内のHyper Concordance (<http://victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/>)を使用した。
- 3 冒頭のネルの眠りの場面と、最後のネルの死の場面との類似については、例えばアンガス・ウィルソン (Angus Wilson 143) や、小野寺進 (52-3) を参照のこと。
- 4 これまでネルとメアリーの類似については数々の論が出されてきた。例えばピアソンは、ネルは「メアリーの神格化である」 (“the apotheosis of Mary Hogarth” ; Pearson 78) と述べている。またローラリー・マクパイク (Loralee MacPike) は、二人が個人的欲求に汚されることのない盲目的な献身を表わすという点で類似していると論じている (MacPike 21)。
- 5 メアリー・ホガースの死の影響でディケンズが『ピクウィック・ペーパーズ』、『オリヴァー・ツイスト』両作品の連載に穴を開けたという事実に関しては、デイヴィッド・パロイシアン (David Paroissien) による説明が、簡にして要である (Paroissien 100)。
- 6 註2に挙げたデータに基づくと、眠りに関連する語は、ネルの眠りに対して110回使用されている。一方で、例えば物語の後半で大病を患い、長らく眠ったままになるなど、眠りのイメージを強く持つ登場人物であるディック・スウィヴェラーの眠りについて、それらの語は29回しか使用されていない。この違いから、ネルの眠りへの言及が群を抜いていることは明白であろう。
- 7 実際、ディケンズはメアリーのことを非常に賞賛しており、1837年5月17日付けのトマス・ベアード (Thomas Beard) に宛てた手紙の中では、“I solemnly believe that so perfect a creature never breathed. I knew her inmost heart, and her real worth and values. She had not a fault.” (*Letters* Vol.1 259) と述べている。
- 8 ディケンズとキルプを関連付けた代表的論考としては、例えばリンジー (193)、ジョン・ケアリー (John Carey 27)、スティーブン・マーカス (Steven Marcus 104)、A.E.ダイソン (A.E. Dyson 26-31) などが挙げられる。

## 参考文献

- Carey, John. *The Violent Effigy: A Study of Dickens' Imagination*. London: Faber and Faber, 1991.
- Cosnett, J. E. "Charles Dickens: Observer of Sleep and Its Disorders." *Sleep* 15.3(1992): 264-267.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Paul Schlicke. London: J. M. Dent, 1995.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House and Graham Storey. Vol. 1. Oxford: Oxford University Press, 1965.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House, Graham Storey, and Kathleen Tillotson. Vol.3. Oxford: Oxford University Press, 1974.
- Dyson, A. E. *The Inimitable Dickens*. London: Macmillan, 1970.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol. 1. London: J. M. Dent & Sons, 1948.
- House, Madeline, Graham Storey, and Kathleen Tillotson. "Preface." *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 2. Oxford: Oxford University Press, 1969, vii-xiv.
- Lindsay, Jack. *Charles Dickens: A Biographical and Critical Study*. London: Andrew Dakers, 1950.
- MacPike, Lorelee. *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence*. London: George Prior, 1981.
- Marcus, Steven. *Dickens: From Pickwick to Dombey*. New York: Simon and Schuster, 1965.
- Newsom, Robert. *Charles Dickens Revisited*. New York: Twayne Publishers, 2000.
- Paroissien, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 1992.
- Pearson, Gabriel. "The Old Curiosity Shop." *Dickens and the Twentieth Century*. Ed. John Gross and Gabriel Pearson. London: Routledge and Kegan Paul, 1962, 77-90.
- Slater, Michael. *Dickens and Women*. London: J. M. Dent & Sons, 1983.
- Steig, Michael. "The Central Action of *Old Curiosity Shop* or Little Nell Revisited Again." *Literature and Psychology* 15(1965): 163-170.
- Waters, Catherine. "Gender, family, and domestic ideology." *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Ed. John O. Jordan. Cambridge: Cambridge University Press, 2001, 120-135.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. New York: The Viking Press, 1970.
- 小松原茂雄. 『ディケンズの世界』 東京: 三笠書房, 1989.
- 小野寺進. 「*The Old Curiosity Shop*, Dickens, あるいはファミリーロマンス」『文化紀要』(弘前大学教養部) 35 (1992): 49-66.

## Nell's Quest for Sleep: Sleep in *The Old Curiosity Shop*

WATANABE Tomoya

As J. E. Cosnett notes, Charles Dickens was very much interested in sleep and dreams, and vividly portrayed them in his novels (Cosnett 264). Among his works, it is in *The Old Curiosity Shop* that he describes characters' sleep most frequently, but critics have not fully explored this aspect of the novel. My aim in this paper is to reveal that the sleep of Little Nell, the heroine, plays a particularly important role in *The Old Curiosity Shop*.

If we investigate Nell's sleep, we can see that the novel can be read as her quest for sleep, and whenever the male characters view her with lustful eyes, she becomes restless and sleepless. Scholars have regarded Quilp as an erotic dwarf who threatens Nell sexually, but my investigation of her sleep reveals that not only Quilp but also other male characters view her lustfully and render her sleepless. She flees from them, and finally reaches a rural village where no male character threatens. In this place, she dies as if she were sleeping peacefully. We see that the pattern of her sleep has a close connection with her fear of sexuality.

The reason Dickens depicted Nell's dread of male sexuality is that the character undoubtedly represented to Dickens Mary Hogarth, his dear sister-in-law. Dickens is said to have had a secret, illicit love for her, and when she suddenly died, he strongly felt that he was responsible for her death. By creating innocent Nell and sustaining her purity throughout the novel, he tried to make amends for this transgression. The male characters who threaten her sexually can all be seen as representing Dickens's own lust for Mary. Thus my investigation of Nell's sleep in *The Old Curiosity Shop* reveals that the novel is replete with indications of Dickens's secret desire for Mary as well as those of his remorse for causing her death.

初出：『関西英文学研究』（2009年12月、日本英文学会関西支部）：57-76.